

暁闇

『新壘』
58-1号

血縁はたやすきさまにあひ集ふ未来耀く意志持ちながら

齡ひとつ重ねし霜の暁闇につきつむる倫理のはかなくて

孤独感 狂れざることの不思議にて潤はす水の咽喉と
ほりゆく

黄昏の謐けさ冥き錯綜のかかるときふたりの想ひ出は
消す

はらからの絆ないろいろ 朝々を死者の渴きにみづたて
まつる

夕暮れの陽

『新壑』4
58-4号

はかなげに漂ふ雲の切れ間より差しくるひかりをふか
ぶか仰ぐ

夕暮れのかなたを沈む巨き陽にいましたじとはかな
き怖れ

きさらぎの月徐々に満ち缺けたれば身の均衡も保た
るるべし

筋だけはせめて通して荒れ猛けよ冬ならばとてきのこ
ならばとて

さやさやと冬の熊笹は風に鳴り入喚ばはむに声の消さ
るる

噴きいづるもの

『新壑』
58号

つみ

冬のしろきは謳はむための雪野原罪科の量ほどに身の
のめりつつ

われをわがいつぱんの杖と立ちながらとどめもあらず噴
きいづるもの

またしても言葉呑みこむ一瞬のわれの咽喉ひたすら
冥し

青春の日はすでに杳し感冒の微熱湯ぶねに燦と鏤む

寡然にしかも容赦なく降る三月の半ばの雪はかたち
もあらぬ

闘魂と云へど未だなまぬるし更けて銀河の鋭さの中

触れてゐてまこと冷たき陶の壺われは前世と如何に閑
はる

ふさふなきものを冀ふにあらずやいま吾れに夫あらば
在世ならばと

みじか世の命さみしく春の日の窓のガラスをひた拭き
にけり

相聞のうらがなしきよ分け入れば迷ひ迷ひてくさむ
らはある

千の幸・万の幸

『新壑』
58-7号

人は群れうすくらがりを帰りゆくかかる情性もかな
しきさきはひ

やまざくらそのきはまりに展くなり千の幸とも万の
幸とも

わが軀より抜け出でしものへの愛と憎いづれにかたむく
とも 惨

わが内部徐々に涸れゆく念ひあり夜の雨音に泪わく
かも

待つ思ひ待たざるおもひこもごとと綴りてわれの詩歌
衰ふ

緑園

『新壑』
58-8号

たんぼほの花いつ音に威儀質す意志迫られて野は初夏

黒髪をほぐして束ねて謳はむか愛しきをみな偽り
の歌

抱へ持つ孤独ひそかに解き放つまなうらすがしく緑園
に待つとき

追ひつけぬひとりを夢に追ひつむるかかる消耗の夜も生
きたかり

くるくると絵日傘廻し人を待つ橋のま中の風ひかるな
り

噴水の自浄

『新壑』
58-9号

をみなにて確かなるあかしに子を^な生せばとことばに母
とふ名の罰

噴き上げて墮つるほかなき噴水の自浄と言ふにやがて
ゆきつく

夏薔薇の散りゆるびゆく夕暮れを放つさびしさくれ
なるの声

しあはせのいつまであると思はねど坂にためらひをほ上
りゆく

しづまらぬこころにありて念ふならね灯せる階に足踏
みはづす

ふたつの魂

『新壘』
58-10号

吹かれきて寄せ合へるふたつの魂つひの日までとふはそ
ら怖ろし

ほむら

あかあかと花ふり零すさるびあの命の炎群地に還すな
り

庭ごとに区切られさるびあの花朱し秩序保たばいつま
で他人

いくばくもあらぬ未来に持まむは折りたたむ傘の雫
ほどのこと

軀をまげて嘆くひととき雲がくるあるかあらぬか片割
れの月

秋の夕べ

『新壑』
58号

残生の冀求と言ふ具体のひとつ線路づたひに夕陽見に
ゆく

耳底にながき夕霧の音を聴く立ちどまれば其処より
の明日

いまさらに何に怖れのためらひぞ頭蓋にひらく半白の
薔薇

ながき寡婦の身の咎と言ふべくは何秋の乳壘さかしま
に振る

温かき土もて塞ぐ蟻の穴おもへばわれにも出口なきこ
と

双つの耳

『新壘』
58-12号

得たるとは喪ふに似て晩夏の向日葵ぐらりと花首揺
らす

いまさらに何か怖れのためらひぞ頭蓋にひらく半白の
薔薇

秋水の韻きしづかに聴く耳の双つを持てばふたつのわづ
らひ

霜の朝われを産みたるたらちねに触れしは素足のふい
なる温み

耳底にながき夜霧の音をきく踏みとどまれば其処よ
りの明日